

[書 評]

Stephanus Axters

*Geschiedenis van de vroomheid in de nederlanden, 4 dln.
Studiën en tekstuitgaven van Ons Geestelijk Erf, dl. 22-25*

Antwerpen: De Sikkel, 1950-1960

dl. I, xxiv + 502pp.; dl. II, xi + 600pp.; dl. III, viii + 498pp.; dl. IV, x + 400pp.

菊 地 智

アクステルスの『ネーデルラントにおける敬虔の歴史』のような、刊行からすでに数十年が過ぎている文献を書評に取り上げるのは異例のことと承知しているが、ヨーロッパのキリスト教思想へのその小さからぬ影響にもかかわらず、中世ネーデルラントの神秘思想が本邦では広く周知されずに留まっていることに鑑みて、この分野の基本文献のひとつとして紹介しておきたい。ただし「書評」の枠内で扱う以上、内容の単なる解説とはせず、本書の書かれた文脈を今日の視点から振り返りながら、ヨーロッパのキリスト教神秘思想についての研究史の中にその業績を改めて位置付けることを、本稿は目的とする。

著者のステファヌス・アクステルス (Stephanus Axters 1901-1977) は 20 世紀ベルギー・フラーンデレンのドミニコ会司祭で、ルーヴェンのドミニコ会神学院で教鞭をとっていたキリスト教史家である。ベルギーの王立オランダ語文学アカデミー (Koninklijke Academie voor Nederlandse Taal- en Letterkunde) の会員も務めていた。中世神秘思想を中心に、修道院神学、聖人伝、民衆の霊性からスコラ学に至る幅広い研究領域において、業績を残している。

全四巻から成る『敬虔の歴史』は、中世から近世にかけての神秘思想史を扱う文献としては、現在スタンダードとなっているジャン・ルクレール (Jean Leclercq 1911-1993) やルイ・コニエ (Louis Cognet 1917-1970) らが 1960 年代に著した *Histoire de la spiritualité chrétienne* (『キリスト教神秘思想史』上智大学中世思想研究所訳)、スイスのゲルマニスト、クルト・ルー (Kurt Ruh 1914-2002) による 1990 年代に上梓された *Geschichte der abendländischen Mystik*, そしてアメリカのキリスト教史家バーナード・マッギン (Bernard McGinn 1937-) の現在もなお刊行継続中の連作 *Presence of God* などに先駆けている。しかし、

二点においてそれらとは異なっている。第一に、扱う対象をネーデルラント——アクステルスは「ネーデルラント」を16世紀の神聖ローマ帝国下のネーデルラント十七州の範囲としており、それは現在のオランダ語圏をカバーする地域に相当する——の神秘思想に限っている。多様な地域の霊性が互いに複雑に影響し合うヨーロッパ・キリスト教神秘思想史の中で、一地域のそれだけ長期にわたる伝統を扱うのは、特異なことに思われる。第二に、この著作はネーデルラントの神秘思想を、ネーデルラントの霊性全体の一部門として扱っている。

第一の点には、19世紀から始まり20世紀に苛烈となったベルギーにおける言語戦争がまったく無関係であるとは想像しがたい。1830年にネーデルラント連合王国から独立したベルギーには、北部を中心にオランダ語話者が、そして南部を中心にフランス語話者がいた。しかし、独立革命の主導者たちの多くがフランス語話者であり、なおかつ産業革命がいちはやく起こって経済的に先に発展したのが南部のワロン地域であったことなどから、教育、行政、法律、政治などの公的な場では、長らくフランス語が全土で優勢であった。それに対してオランダ語話者の多い北部フラーンデレン地域でオランダ語の地位向上を求める運動が興り、やがては国を南北に二分する言語境界線が引かれ、一地域につき一言語を使用することが決められた。それは、ルーヴェン大学におけるフランス語部門の追放に象徴されるように、フラーンデレンからフランス語話者を排除する結果となる。

そうした中、19世紀後半以来、フラーンデレン人の文学者、文献学者、神学者、霊性史家らはオランダ語精神の源泉を求めて、中世の写本に残された神秘思想家のテキストを渉猟した。それによって中世オランダ語圏で最も重要な神秘思想家ヤン・ファン・リュースブルクが再評価され、また、何世紀も忘れ去られていたベギンの著作家ハーデウィヒが再発見されるなどした。1925年には、デシデル・ストラッケ (Desideer Stracke 1875-1970) やヨゼフ・ヴァン・ミールロ (Jozef van Mierlo 1878-1958) ら四人のイエズス会士がアントウェルペンにリュースブルク協会 (Ruusbroecgenootschap) を設立し、中世オランダ語による作品の出版と研究を強力に推し進めることになる。中世オランダ語圏の代表的な思想家・著作家が今日のフラーンデレン地域の出身であるからにもせよ、そうした事業がその頃オランダ人よりもフラーンデレン人の主導でなされていたことの背景には、フラーンデレンの言語ナショナリズムが存在していたことは疑いない。

アクステルスが『敬虔の歴史』を刊行したのもちょうど、ヴァン・ミールロらリュースブルク協会の第一世代がハーデウィヒやリュースブルクのテキストの公刊を完了した時期である。ドミニコ会士のアクステルスはイエズス会士らのプロジェクトに直接加わっていないが、リュースブルク研究所が設立当初から発行しているジャーナル *Ons Geestelijk Erf* (『我らの霊的遺産』) の叢書からその四卷

本を出版している。

しかしこの本は神秘思想史を扱うとは言え、オランダ語圏に現れた神秘思想家たちを単に片端から取り上げているのではなく、彼らに共通する特徴を描き出している。そこで、アクステルスのこの文献を、スタンダードとなっている他の神秘思想通史から際立たせている第二の点に注目したい。すなわち彼はこの著作で、神秘思想を靈性の一部門として扱っているとのことであるが、この本のタイトルは他でもない「敬虔の歴史」である。「敬虔」と訳したオランダ語の *vroomheid* は、ドイツ語の *Frömmigkeit* と姉妹語で、フランス語や英語ならば *piété / pieté* あるいは *dévotion / devotion* に意味的に近いが、アクステルスによればそれは「人間の神に対する従属関係のあらゆる体験」(I, p. xv) と定義される。すなわち、自らを超えた存在——もとよりアクステルスが対象とするのはキリスト教の神だが——を実感し、確信し、証する人間の営みの総称である。アクステルスはそれを、擬ディオニュシオスが定義するような「神秘主義」(*mystiek*) とは同一視せず、むしろ神秘主義を「敬虔」のひとつの表現と見なしている (I, p. xvi)。「敬虔」はそれゆえ、神秘主義の他に、修道院神学にも、神への奉仕において特筆すべき生き方をした人物の「伝記」(*vita*) にも、一般信徒が書き残した文書にも見出される。あるいは、キリスト教信仰に関するさまざまな実践、たとえば典礼や祈祷や、民衆の宗教運動や、さらには造形美術などにも、「敬虔」は表されている。それは神についての理性による理解よりも、体験によって培われる神に対する心情に関わることである。そしてアクステルスは、知的エリートたちが作り上げた神学思想史の枠組みではなく、特別な啓示を受けた神秘思想家たちによって成立した神秘思想史という枠組みでもなく、人々の神をめぐる体験や心情の総体という枠組みの中でこそ、まさしくネーデルラントのキリスト教神秘思想家たちの本質を捉えるべきである、と理解しているようである。

ここで各巻の中身を概観したい。第1巻は「1300年頃までにかけての敬虔」の副題を有し、カトリックの信仰がネーデルラントの地域に根を下ろし、独自の精神文化を創造し始めるまでの時代を扱う。修道院改革のさなか11世紀に創設された諸修道会、とりわけシトー会の中から新しい靈性の表現——『雅歌』の新解釈と婚姻の神秘主義——が誕生するところ、ならびにネーデルラントを中心に興った民衆の宗教運動であるベギンの活動が、この巻のクライマックスである。第2巻「リュースブルクの世紀」は、ネーデルラントにおける托鉢修道会や隠修士運動の展開、ならびにリュースブルクと、彼が修道院長をつとめたフルーネンダールの律修参事会修道院の著作家たち(ウィレム・ヨルダース、ヤン・ファン・レーウェン、ホーデフェルト・ファン・ウエーヴェルなど)を中心に取り上げる。第3巻は「新しき敬虔」(*Devotio Moderna*)の副題のもと、ヘルト・フロートの思想、彼が創始した「共同生活の兄弟姉妹会」(*de broeders en de zusters*)

van het gemene leven) の靈性, ならびにオランダ南部とフラーンデレンを中心に広まったウィンデスヘイム系列律修参事会の発展と後代への影響を扱う。第4巻「トレント公会議以後」は、北部ネーデルラントをプロテスタントが席卷し、やがて北部七州がスペイン・ハプスブルグ家の支配から脱する中、カトリックに留まったネーデルラント南部における靈性の展開を扱う。新興修道会のイエズス会やカプチン会などの活動や托鉢修道会の再興などが取り上げられる。なおこの巻では、オランダのプロテスタント側の運動や靈性は扱われていない。ネーデルラントの靈性史を著すのが全巻の主旨であったはずだが、著者の視点は結局カトリック・ネーデルラント、すなわちフラーンデレンを中心とするそれであったことが、ここに露呈している。付け加えると、著者は伝記、聖人伝、祈祷書、典礼書、ならびにそれらについての19世紀以来蓄積されていた膨大な研究の成果に目を通し、そこからまとめた各時代の「在俗信徒の敬虔」(*lekenvroomheid*) を、各巻に一章を設けて報告している。

全体を見て分かるのは、この地域では、フランスの司教座聖堂学校や大学で営まれた知的神学が、多くの場合、靈的な体験や心情に依拠する立場から忌避もしくは批判される対象とされてきたことである。修道院の伝統に発する「知恵ある無知」ないし「聖なる無知」の理念が、ネーデルラントの民衆と思想家たちを一貫して動かしているようである。ペトルス・アベラルドゥスに対して理性偏重であるとして論争をしかけたシトー会士サン・ティエリーのギョームをはじめ、「世俗の学問によらず、聖霊からの靈感によって著作をした」と後代の伝記で言われるリュースブルク、在俗信徒で修道院の「料理人」であった神秘思想家ヤン・ファン・レーヴェン（アクステルスはファン・レーヴェン作品の詞華集を出しており、思い入れが強かったようである。*Jan van Leeuwen: Een bloemlezing uit zijn werken*, Antwerpen, De Sikkel, 1943）、聖職者としての将来を囑望されながらパリ大学での学位を断念し、民衆への説教家となったヘルト・フロテ、彼の活動が発端となった「新しき敬虔」の運動、パリ大学での学業のちフルネンダールに戻り、フランスの神学者・枢機卿ジャン・ジェルソンに対して師のリュースブルクを擁護したヤン・ファン・スホーンホーヴェン——このように列挙するだけでも、知的神学に対立する体験的靈性の系譜が見えて来る。しかも、修道院の理念であった「知恵ある無知」が、修道院神学の衰退後は、ネーデルラントで民衆のあいだに受け継がれ、それがこの地域の神秘思想の母体となっていたこともうかがえる。アクステルスがそこにネーデルラントの靈性に何世紀にもわたって存続する特徴を見ていたのは間違いない。その系譜がしばしば「フランス」の理性主義や啓蒙主義に対立するかたちで現れていることも、「フランス語」に対して起こった近代フラーンデレンの言語戦争の顛末と照らし合わせると、興味深い。

『敬虔の歴史』は全巻の出版に10年がかかり、同時代に出された書評は各巻の個別的内容への反応に限られ、四巻全体を扱うものは見当たらない。また公刊以後は現代にいたるまで、扱う資料の膨大さゆえこの分野では記念碑的な文献と目されてはいるものの、個々の思想家についての研究で参照される、どちらかと言えば事典のような用いられ方をしているように見受けられる。しかし以上で見たように、全巻を通して著者アクステルスはネーデルラントの神秘思想の固有性を浮かび上がらせていることを、今日の視点から改めて評価すべきであるように思われる。『敬虔の歴史』に取り上げられた思想家や作品のうち、現在までに当時とは比較にならないほど研究が進んだものもあるが、いまだにほとんど手つかずに残されているものもある。たとえばリユスブルクは、最新版の全集（Corpus Christianorum: Continuatio Mediaevalis, vol. 101-110）に英訳を付けるなどリユスブルク協会による普及の甲斐もあって、オランダ語圏外でも広く知られるようになった。その一方で、ヤン・ファン・レーヴェンの作品や、16世紀の著者不明の『福音の真珠』（*Die evangelische peerle*）などは、神秘思想史上の重要性にかかわらず、原典もまだ一般には公刊されていない（『福音の真珠』の原典版は、当原稿の校正直前に公刊されたことを報告しておく——*Die grote evangelische peerle deel 1 & 2, uitgegeven door Guido de Baere, Leuven, Peeters*）。それらが日本をはじめ諸外国で研究されるようになるまでにはさらに時間がかかるであろうが、そのときには、言語ナショナリズムや宗教アイデンティティからも離れて、「ネーデルラントの神秘思想」の固有性がさらに多角的に検証されることと思う。